2Kp-15　　被服実習科目の評価に関する一考察

上野学園大短大　遠山千代子

【目的】　近年、家政学の被服実習科目は大学のみならず短期大学においても衰退または縮小化の傾向が顕著である。しかし、巷間では一般に被服そのものに対する興味関心は老若男女ともに高く、特に個性表現を重視する若者には手作り志向もかなり見受けられる。本論は、実習科目の充実を特色とする本学における被服実習科目の実態を「評価」という観点から分析し考察することを目的とする。

【方法】　分析対象は1987～1992年度入学の本学家政科学生で、被服構成及び実習（洋裁）の履修者７４０名である。洋裁Ⅰ（一年次必修）および洋裁Ⅱ（二年次選択）の成績評価などをもとに分析をおこなった。

【結果】

①成績評価の偏りは洋裁Ⅰ（必修）では小さく、洋裁Ⅱ（選択）では大きい。

②洋裁Ⅱの選択理由は積極的・向学的なものが多いが、選択割合は総じて減少傾向にある。

③洋裁Ⅰの成績評価が高いほど洋裁Ⅱの選択割合が高い。

④成績評価の変化では、洋裁Ⅰの成績評価が低いほど洋裁Ⅱにおける上昇傾向が見られる。

⑤洋裁Ⅰにおいて「実習進度表」を用意し「学生による自己評価」を記入させたところ、教師評価と自己評価の一致度をはかることができた。これはまだ試用の段階であるが、今後も成績評価に重要な役割を果たす可能性があるものと考えられる。